

## 上越教育大学研究プロジェクト 終了報告書（若手研究）

研究代表者 所属・職名 臨床健康教育学系 助教

氏 名 大宮 宗一郎

研究期間 令和 2 年度

研究プロジェクトの名称	システムズ・アプローチの視点を踏まえた校務分掌にとらわれないチーム支援システムの構築に向けた基礎的研究—理論的考察と現職教員の実践の検証を踏まえて
研究プロジェクトの概要	<p>学校の教員は、不登校、いじめ、発達障害、虐待など多発するさまざまな問題に同時進行で対応している。特に担任は、これらの問題に1人で対応せざるを得ないことが多く、疲弊してしまうリスクを抱えている。このような状況を打開するために、学校内外の「連携」によるチーム支援が強調されているが、学校内の連携においては、校務分掌に縛られ、手段であるはずの連携が目的化してしまい、チーム支援が有機的に機能しないケースもある。その一方で、教員や子どもの特徴、教員間あるいは教員と子どもの関係性などを考慮した上で、校務分掌の枠を越えた柔軟なチーム支援が成功している事例もある。このような支援のあり方は、「個人」と「環境」を俯瞰的に捉える中で、登場人物や組織の「関係性」に注目した理解を行うシステムズ・アプローチの視点からの理解が可能であるが、学校現場でシステムズ・アプローチの視座を用いた支援については、SC (e.g., 大宮・田村, 2020; 吉川・赤津・伊藤, 2019) や養護教諭 (岩崎, 2018) などの論考があるだけで、教員を中心とした支援については十分に論じられていない。そこで、本研究では、教員がシステムズ・アプローチの視座を用いた子どもの支援を行うことの意義について検討することを目的とする。</p>
研究成果の概要  ※申請時にチェックした「取組課題」との関連とその成果も明記すること。	<p>システムズ・アプローチの視座を用いて支援を行っている中学校の養護教諭と、この養護教諭とチーム支援を行っていた教員 2 名の計 3 名を対象にインタビュー調査を行い、修正版グラウンテッド・セオリー・アプローチを用いて質的に分析した。分析の結果、教員がシステムズ・アプローチ（以下 SA）を用いて行う子どもの支援のプロセスは、【日常】における準備とトラブル発生時の【ケース対応】の 2 段階で構成されており、【日常】と【ケース対応】での取り組みが、教員の【安心・安全】につながっていた。つまり、【日常】においては、勤務校の組織や文化、習慣、考え方などになじませながら子どもや教員の情報を収集し、【ケース対応】の段階で、これらの情報をもとにケースの特徴に応じた校務分掌にとらわれない柔軟なチーム編成を行い、子どもに寄り添った支援を行っていた。そして、このような連携・協働体制によって作られた信頼関係が教員の【安心・安全】につながっていた。以上の結果から、教員が SA の視点を踏まえたチーム支援を行うことによって対象となる子どもの支援に関わる人々の関係性を俯瞰的に捉えながら、教員が孤立することなく、安心・安全な感覚をもって子ども支援を行うことができる可能性が示された。教員の安心・安全が子どもの安心・安全につながることも踏まえれば (大宮・田村, 2020), 教員が SA の視座に基づく支援を行うことは、子ども支援と同時に教員の支援が同時に達成されることが期待されることが示された。</p>
研究成果の発表状況	2021 年 2 月下旬時点で、投稿論文の執筆中
学校現場や授業への研究成果の還元について	2021 年度の論文発表を通じて広く学校関係者に還元する予定である。